

よりよく生きるための言葉

生命誌研究館館長

中村 なかむら

桂子 けいこ

もし言葉がなかったら……イヌも小鳥たちも言葉と呼べるものは持っていないせん。でも、彼らがつまらない生き方をしているか。そんなことはありません。仲間たちと交わり、子どもを育てている様子を見ると、むしろ教えられることの方が多いくらいです。今私たちはそれだけの生きる力を持っているのでしょうか。言葉は人間特有のもので、人間を人間らしくするのですが、その前に私たちは生きものとしてしっかりと生きるといふ基本を持っていないかもしれません。まず、自然の一員としての自覚を持てるようにすることが大事です。それは難しいことではありません。とにかく自然と接する機会を持てばよいのです。

すると、美しいと感じること、ふしぎと思うことなどがたくさん生まれてくるでしょう。それを表現したい……その願いを叶えてくれるものとして幸い私たち人間は「言葉」を持っています。言葉を使つて考え、身近な相手にそれを伝える。相手から言葉が返ってくる。「対話」が生まれます。こうして私の

存在が実感でき、仲間と一緒にいることの喜びが生まれるのです。これが生活であり、生きることなのではないでしょうか。そこから芸術が生まれ、学問が育ちます。

学校という制度があり、コンピュータもありという中で言葉をどう教えるかと考えるのではなく、言葉の本質から迫っていく。そこでは、自然と接し人と接することの大切さを子どもに伝える大人の言葉は、自ずと重みのあるものになるはずです。それを受け止めた子どもは、自然を愛し、人を思いやる心を持つでしょう。これが、人としての必要・十分条件です。

くり返します。言葉を持たないものたちが、それでもみごとに生きていることをしっかりと受け止めたうえで、言葉を用いたからこそよりよく生きたとと言えるようにしようではありませんか。最近言葉が、人を打ち負かしたり、非難したり、あざむいたり、嘆いたりするために使われ過ぎています。言葉が可哀想です。

言葉の力

言葉の力

大阪大学名誉教授

宮地 みやじ

裕 ゆたか

自由民主の先進国日本も、こんなにも腰の定まらない文教政策を取っていたら、国家の根本が脆弱になりはしないかと案じられる。しかし、大きく見れば、それは世界の表層史の一つの現象である。人間にとつての根本的な問題は古来あまり変わっていないのであって、「言葉」というものも、古今東西、人間のもつとも根本的な問題の一つだったし、今もそうだと思う。

「揺りかごから墓場まで」と対応させれば、「うぶごえから辞世・遺言まで」、人間は自分の言葉と付き合わなければならない。神が人間をそのように創った。宿運である。言葉は自分の一生の鏡であらう。鏡に向かって「おまえはだれ」と問うように、自分の言葉との対話を積み重ねる。それによって人間は「言葉の力」をはぐくみ、自分自身を育てる。対話の基本は、「自己との対話」である。「考える」とことと重なり合うところが大きい。考えをメモや短文に記録して、しだいにエッセイや考察・論究にまともていく。そのあいだにも、自己との対話、自分の言

葉との対話が積み重ねられる。それなしには、どんな大著も、一編の詩も歌も、成りししない。「自己との対話」を積んだ者同士の間でこそ、本当の対話が成り立つのではないだろうか。

言葉による「表現」は、いつまでもなく、重大だが、本当に重大なのは、表現以前の、その根底にある自分の言葉との対話であり、「不立文字」の思惟あるいは思索である。思惟・思索と言つても、哲学的・倫理的・宗教的プロのそれをいうわけではない。われわれ普通人のだれもが一生付き合う自分の言葉の力を、その根底から鍛えようといっているだけのことである。

教育の直接の関係者はもちろんのこと、文教政策にかかわる為政者たちは、とくにみずからの声に耳を傾け、施策のありかたに思いをひそめて、国家百年の大計をあやまることのないように努めてほしいと願っている。